

驚く心

驚かぬ心

葬列が街を静かに通る。

白い巾の装束をつけた婦人のうつむいた顔にはハンカチがあてられている。

「随分立派な葬式だな」

自転車乗の小僧が自転車から降りた。八百屋の女将さんが店から出る。看護婦が病院の窓から顔を出す。そんな人だまりが美しい葬列を見送る。

葬列は静かに街の角を折れて見えなくなった。人々は又各々の仕事のために散つてしまう。何の悲しみも死の暗示も受けなくて・・・

おお驚かぬ心。

科学者よ。

君たちは人間の心を眠らした。

「蠟燭がある。それに火をつけた。燃える。蠟がなくなると、火が消える。」

この譬喩で私の死を説明しようとした、否、説明したと信じている。魂の眠つた者はそれに賛成した。

教育をうけた者、それは死を考えることを馬鹿だと言う。老人臭いという。弱者だという。呪われたる教育よ。

教育とは、英語を記憶し、外国の地名を記憶し、西洋曲に合して躍舞^{はねま}うことのみなのか。それならば私は現代教育からおいとまする。

「先生。私は宗教に入りたいと存じます。お導き下さい。」

「あなたは死について考えていますか。」

「別に何とも……死よりも今日一日が、もつと有意義でありたいと存じます。」

「死後をいうのではありません。死であります。死そのものです。」

「いいえ。けれど、死なんかどうでもいいのです。」

それが高等女学校を卒業したあなたのお口から出ますか。あなたの学んだ女学校の先生方には、あなたに冷たい学問を記憶させる以外に、あなた自身の生について死について、考えることを、考えねばおれぬ心を養って下さる先生はなかったのでしょうか。

すこぶる大なる、深い、熱心な願

若い人たちが国木田独歩先生の「牛肉と馬鈴薯」を読んでいる。私も読みたい気になつて、もう一度読み直して見た。教えられるところが多い。牛肉と馬鈴薯の主人公岡本は数人の友達に取り囲まれて、彼の不思議なる願について語る。

「僕の不思議な願というのはすこぶる大なる願、深い願、熱心な願で、かの『朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。』というのと大いに意義を異にしているけれど、その心持ちは同じです。僕はこの願いがかなわん位なら今から百年生きていても、何の役にも立たない、一向嬉しくない。むしろ苦しく思います。全世界の人悉くこの願をもつていないでもよろしい。僕ひとりこの願を追います……。」

明治の大文豪独歩先生は岡本の言葉として、独歩自身の願を描いてかくの如く言う。「全世界の人悉くこの願をもっていないでもよろしい。僕独りこの願を追いませ。」こうした真剣な願を追う人が何人ある。然らばその真剣な願とは何か。すこぶる大なる願、深い願、熱心な願とはそもそも何か。彼の話は続く。

大政治家か

「今に申します。諸君は今日の政治に飽きられたらうと思う。そこでビスマルクとカプールとグラッドストーンと豊太閤みたような人間をつきまぜて、一つの鋼鉄のような政府を作り、思い切った政治をやって見たいという希望もあるに相違ない。僕も実にそういう願を持っています。しかし僕の不思議なる願はこれでもない。」

聖人か

「聖人になりたい。君子になりたい。慈悲の本尊になりたい。キリストや釈迦や孔子のような人になりたい。本当にそうになりたい。しかし、もし僕のこの不思議なる願がかなわないで、もつてそうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。」

釈尊でもキリストでも孔子でも決して大聖者たらんとして大聖者になつたのではない。彼ら偉大なる聖者たちは、彼ら自身のうちにもゆる不思議なる願、一生追うても追いきれぬ真剣な願に生きた人ではあるまいか。彼岡本の願が聖人になりたいことでもない。然らば何か。

都会の車夫でも

「山林の生活と言つたばかりで僕の血は湧きます。僕をして北海道を思わしめたのもこれです。僕は折々郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて遠く地平線上に国境をめぐる連山の雪を載いているのを見ると、すぐ僕の血は波立ちます。しかしです。僕の一念一度かの願に触れると、こんなことでもなくなる。もしも僕の願さえかなうなら、黄塵万丈の都会の車夫になつてもよろしい。」

大宗教家か哲学者か大科学者か

「宇宙は不思議だとか、人生は不可解だとか、天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科学と哲学と宗教とは、之を研究し闡明し、そして安心立命の地をその上に置こうと悶えている。僕も大哲学者になりたい。ダーウイン洗足という程の大科学者になりたい。もしくは大宗教家になりたい。しかし僕の願というのはこれでもない。もし僕の願がかなわないでもつて大哲学者になつたなら、僕は冷笑して自分の顔に「偽」の一字を烙印します。」

噫。現代に「偽」の一字を願にやきつけけないですむ哲学者が何人あろう。虚偽の二字から出ることの出来る宗教家が何人あろうぞ。そも、不思議なる真剣な願を追うている人が何人あろうか。

汝のおぼつかなき眠りより覚めよ

岡本は静かに

「喫驚したいというのが僕の願いなんです。」

彼の不思議な願いとは、ああ、実に「びつくりしたい」のであった。

「何だ馬鹿々々しい。」「何のこつた。」「落語か。」人々は投げ出すように言つて嘲ける。

けれど岡本は続ける。

「こういう句があります。『あはれ眠半ばにして夢魔に襲はれたるもの、目覚めよ。身を震はせ、一この魔を逐ひ、而して汝の覚束なき眠より覚めよ』即ち僕の願いとは夢魔を振り落したいことです。」

更に彼は

「宇宙の不思議を知りたいという願いではない。不思議なる宇宙を驚きたいという願いです。」

「死の秘密を知りたいという願いではない。死という事実に驚きたいという願いです。」

噫。ここまで読んで、私は私を見つめる。私への大鉄槌ではないか。何を見ても平気なる汝よ。私の机上には独歩氏の他の著書も序に開かれてある。「岡本手記」の頁をくれば、

「幻影よ、幻影よ。

人は悉く最大なる事実を見る能わずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に 3 事実を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。我等は最早太陽を見ざるなり。ただ太陽の幻を見るのみ。月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ……

我等は死を見る能わず、ただ死体を見るのみ。生を見ることなし、ただ生体を見るのみ。故に生死の不思議に打たれずして、生体の死体となりしを見るのみ。否、生体を見、而して死体を見るのみ。

凡て人が事実を見ずして幻影を見るのもつとも甚しき例は死の場合なり。ルーテルはかつてその友人アレキスの電死を傍に見て、死の事実を見得たり。普通はただ幻を見るのみ。

おお汝！ 無明業体なる汝！

ルーテルは、ウォルムスの大会に於て帝王の威光にも屈しなかつた、マルチン・ルーテルが十九歳の時、学友アレキスが雷にうたれて死んだのを眼前に観て、死そのものの不思議に驚いたというのに、覚めざる汝よ！

汝の親族が死し、汝を愛した隣人が死に、汝の知人が急なる変死をしても、汝は終に平気なのだ。

覚めたい！ おどろきたい！

『僕等は生れてこの天地の間に来るや、無我無心の小児の時から色々な事に出遇う。毎日太陽を見る。毎夜星を仰ぐ。是に於てかこの不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙万般の現象も尋常茶飯となつてしまふ。哲学で侯の、科学で

御座ると言つて、自分は天地の外に立っているかの態度を以てこの宇宙を取り扱う。』

毎日太陽を見る。

毎夜星を仰ぐ。

毎日人が生れたのを聞く。

毎日人が死んだのを聞く。

そうして汝はついに一つのおどろきすら持たぬ眠れる汝になつたではないか、けれども汝は、全てにおどろかぬ汝は、更に汝自身にすらおどろかないではないか。

『僕の知人にこう言つた人があります。吾とは何ぞやなんていう馬鹿な問いを發して自ら苦しむものがあるが、到底知れないことは如何にしても知れるもんでない。』

『思え、思え。伴武雄何処にある、古川駒造何処にある、山口行一何処にある、有光里子何処にある、藤形何処にある。願わくは吾心さめよ、嗚呼希くば吾心めざめよ。』

爾の今すむところ何処ぞや。これ古き都に非るか。ここには千年の歴史あり。されど平清盛何処にある。花の如き平家の公達今何処にある。』

陰謀、企画、叛乱の跡、ここにあり、その人らいつこにかゆきし。足利義政何処にある。その銀閣寺は十銭の見物料を徴して空しく明治の代の見世物となりぬ。豊臣秀吉いつこにかある。維新の諸豪傑何処にある。

ああ、われここに在り。われここに立つ。ありしものなし。今あるものも又なからん。吾何処より来り、吾ついに何処にかゆく。希はくは吾心さめよ。希はくは吾がにぶれるこの心さめよ。この世の夢よさめよ。わが願ひは宇宙の不思議を明らかにせよ。んことに非ず、人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。ただめざめんことなり。『秘密』に戦慄せんことなり。不思議に驚魂悸魄せんことなり。』(岡本の手記)

ああこれが地上の全てではないか。

われここにあり。

われここに立つ。

思えば一切が神秘である。不思議である。けれども私は終にこの不思議におどろかないのである。

世界のありとある哲学、世界のありとある科学、それ等がこの不思議に対して一指でも解決をつけてくれたか。

われここにあり。

われここに立つ。

吾何処より来り、

吾ついに何処にかゆく。

天地間巖然として我一人、似たものもなく、同じものもない。我は今流れ流れてここにある。何故に英国に生れなんだか。何故に女子でなかつたか。何故に悲しまねばならぬか。何故に苦しまねばならぬ。何故に彼の男と彼女とを父と母とに持ったか。

吾は終に何故に吾なるか。

三千年昔のこのとき得ぬ事實は、大正の今日の終にとき得ぬ問題である。人は唯、名誉を得ることに苦む。財産を貯えることに苦しむ。人はただ愛せんことに苦しむ。けれど私はさめざる汝を抱いて泣く。

覚めたのではない。めざめたのではない。

我は終にめざめないのだ。我は終に目覚めることが出来ないのだ。

目覚めない泣くより外ないのか。

否、目覚めないときえ目ざめぬのだ。

目覚めんとしていよいよさめず。

おどろかんとして終におどろかず。

我が魂は永劫に目覚めない煩惱の一塊にすぎぬのか。

国木田独歩氏の病が重くなると、植村牧師は神に祈ることをすすめた。独歩氏は祈ることの出来ない自己を懺悔し、祈らず懺悔せざるに救う神を求めて死んだ。独歩氏のこの崇高なる目覚めは決して、浅薄なる見方をして、我田引水の説をなす材料にしたりしてはならぬ。

「岡本」という小説の主人公にことよせて独歩氏が、目覚めない自己に泣き、驚かざる魂を見つめておどろいていることは、生命の深みを求めた氏の尊い世界である。

不二不二

私はおどろく、目覚めないで平気でおる所の私におどろく。目覚めようとして益々目覚めず、目ざめれば目ざめるだけ内なる目覚めない汝におどろく。

見つめようではないか。目覚めぬ我を。

目覚めようではないか。目覚めない我に。

覚めれば覚めるだけ、覚めてくれぬは無明業によつて作られたる我である。

覚めぬ我を見て、いよいよ覚めるは如来のみ光である。まことに如来は、さめたまいし全体であり、我はさめぬものである。さめたまいし如来とめざめざる我とは一体である。南無阿弥陀仏とはその一体の自覚であり、さめざる汝のうちに叫びたまひし如来の名告りであり、泥の中に咲き出でし白蓮華である。

心の清水

水気の少しもない沙漠、山も見えぬ、河も見えぬ。砂の波をうつ大沙漠、その大沙漠の中に泣いて立っている男。

一隊の隊商が通る。幾十人かの人間と駱駝が幾十頭、数人の女がいる。その足には重い鎖がついている。鎖をきって逃げようか。どうしてこの大沙漠を生きて行かれようぞ。でもこのままいれば死である。男の道具に使われている囚れの女。隊商の仲間では女の奪いあいに毎日血を見るような争闘がつづく。

男は沙漠のような人生に水が与えられないで泣いている。

女は囚れの悲しい身を、十悪五逆五障三従だと言つて泣いている。

宿命、苦悶、悪業、絶望、人生はついにそれだけか。親と子と争う。兄と弟が喧嘩する。夫と妻とが憎みあう。家と家とがにらみあう。上官と下級の役人との間が冷たい。団体と団体とが戦う。思想と思想とが、宗教と宗教とが、社会と社会とがのしりあう。国と国とが戦争する。時間がたつにつれて活動映画のようにこの争いが輪廻されてゆく。私もその一員に加わって暗から暗に流れて行くのか。

「一滴の水さええない。喉が渴いた。水がほしい。」

どうすれば水が得られるか。人はそれを知らないのだ。

隊商たちの仲間には金というものがある。なくてはならぬ。名誉、地位、財産、そんなものが出る。嫌でも好きでも差別が出来る。隊商の仲間には毎日争いがたえぬのは、嫌でも出来るそれらのものを、無理にでも自分がとろうとするから出来る。とつたら幸福になるか、喉の渴きがなくなるか。しかし、金も地位も名誉も、それは決して水ではない。

彼女は誰がどう言っても聞かなかつた。死人のように血色のない、芝居に出る悪婆のような物凄い顔色して叫びながら走つた。「世間の奴に真はないのだ。涙のある者はいないのだ」。けれども彼女が行く道に、彼女よりもつと不幸な女が裸で倒れていた。それを見た時、それを見た時だけ、その言葉がやんだ。そうして貧しい彼女であることを忘れて上着を一枚ぬいで与えた。裸で倒れている女の目には涙が光つた。6
そしてその口からは「ありがとうございます。」の一言葉がほとばしり出た。与えた彼女の眼にも涙が光つた。

眼の涙は胸の涙から出る。

おお、その胸の涙こそ、

あなたを救う、あなたの求めて求めて走つた甘味しい水ではなかつたか。

あなたの心の喉をうるおす水ではなかつたか。

愚なるが故に走りすぎた。

生命の水を求めて、求めて走つたのだ。

けれどあなたの喉をほんとうにうるおす水は足下にあつたのだ。

足下は荒れた石原だと言うのか。

足下は乾いた砂原だと言うのか。

足下は掘つたが清水は出ないと言うのか。

痛む心、傷ついた、荒んだ心、絶望した心、疲れた心、

汝の心が如何に荒んでいても、それはそのままでもいい。

谷間の清水は珠のような宝石の間から湧き出るのか。

杉の木の側からでも、

岩石の間からでも、

凹凸のある石原からでも、

落葉の下からでも、

自由にこんこん湧き出るではないか。

聞けよ、地下にはこんこんと清水の音が聞えるではないか。

走るのをやめよ。

汲め、足下に湧く清水を。

掘れ、泣く汝の魂の底に湧く清水まで。

親と子とが愛しあう。兄と弟とが愛しあう。夫と妻とが一体である。家と家とが温く交る。上官と下級の役人とが愛顔で向い得る。団体と団体とが提携しあう。思想と思想、宗教と宗教、社会と社会とが、助けあい磨きあう。そこに私どもの渴きを癒す清水が流れる。

たとえあなたをとりまく千人が千人、温い愛の心を、清い真水を捧げても、あなたの心が受けないならば、あなたはやはり水がないと泣かねばならぬ。

たとえ周囲の人たち全部が荒んだ、乾いた心でいるようでも、あなたのみ心の底から清水が流れ出るならば、あなたの世界は豊かな露に輝き、あなたのみ胸の清水に皆の者が蘇るだろう。

愛し得る心。

それはあなたと、あなたの周囲とをうるおす清水である。

法然上人と親鸞聖人との間のような、切つても切れぬような関係で師匠を有する者は幸である。師と弟子との間は物質によつては結ばれぬ。師の人格を信ずる心、師の全てを受け入れる心、師を尊敬し、愛慕する心、これが弟子を師につなぐ心であり、弟子を真に愛する心、弟子の全てを赦す心、この心、師と弟子とを一つにする心である。

我が全部を師匠の前に投げ出してその教えを乞うことの出来るほど、尊敬愛慕する師を持った者は幸である。

現代人は皮肉である。小賢しい智の持ち主である。現代人は自分の全てを赤裸々に教えを乞うほど無智でもなく愚者でもない。現代人は高慢なる不幸者である。何故ならば彼らは生命の水から遠ざかるからだ。

「我等の道は我等自身が開いて進む。」その言葉で誰の前にも頭の下らぬ高慢の態度に勢いをつけようと言うのか。学校における同盟休校は何処から出る。学校の生徒たちが、甚しいのは女学校の生徒までが、教師の排斥運動をする態度は正しい仕方であろうか。誇るべき事実であろうか。

明治維新までの寺小屋に、松下村塾に、武芸の道場に、大正の今日のような師弟の間の冷たさがあつたであろうか。師と弟子との間に愛がなくても、尊敬がなくても、活きた字引や、会社の椅子に動く機械は出来よう。けれども魂の裏よりこんこんと愛の清水の湧き出づる人格者、真人間が出来るであろうか。

真に師を慕い得る愛の人でなければ、師より真の独立が出来るものではない。

見よ。「たとひ法然上人に賺されまいらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候」とまで、師匠法然に信順せる聖親鸞にしてはじめて、師匠よりも進んだ獨特の天地に出でて、宗教史上の開祖となつたではないか。真に慕い得る師をもつ者は恵まれた人であり、敬慕しきることの出来る心情を有することは、心の泉を掘ることの出来る第一条件である。

講師の悪口を言いながら、その講演や説教を聞きに集る人たちがあつた。それらの人が帰路についた時「うまいことを言う男だなあ」「あの男の言うことはまちがいだ」、これ以上の言葉がその口から出る心配はない。もしそれが宗教の道場である場合には、同行たちは極楽や天国に行くことの道理を知ることが出来ても、人になることは出来ない。

正しい話でも、まがつた心で聞けば、まちがいにひびく。少しは間違つた話でも正しい心で聞けば、正しい道が与えられる。謙虚な心で聞き得る心、それは命の道に出る第一歩である。正しい心でまちがつたことを聞くよりも、まがつた心で正しいことを聞くことが恐しいことである。

検査官のような態度で人の話を聞く僧侶たちの前には、仏の道は永遠にとぎされる。批判の眼の光るところ、そこには真理は永遠に姿をくまらず。高慢な心の動くところ、そこには、愛の泉は固くとぎされて、悪魔がその恐しい姿を表す。真理のかくれた処、悪魔のはびこる所、そこには、万人をうるおし、我を救う生命の清水の流れようはずがない。

夜は更ける。机の側には蚊取り線香がたいである。もう三度立てかえた。

机の上には電燈が光っている。けれども未だ電燈の光をつけかえる必要がない。

他に水がくみこまれる。三日したらなくなつた。

溪間の繁つた木の間からは清水が湧く。如何なる年寄に問うてもその清水の涸れたのを見たことはないという。

電燈の光はなぜつづくか。

溪間の水はなぜつづくか。

然るに汝の愛の光はなぜ失せるのか。

汝の愛の水はなぜ涸れるのか。

電燈にも谷間の清水にも源がある。然るに汝の愛にはその源を欠いていないか。

愛の源とは何か。

真如界との交通、もつと平易に言えば、汝に真の信仰があるだろうか。

大沙漠の中に茂る森、その中に湧き出す清水、その清水にも源がある。

人の心の中に輝く真愛の心、その心にも源がある。

親鸞は信巻にその信仰を表して、種々なる言葉で説明した。

一心、専念、深心、深信・・・真実の一心、真心・・・

信心とは真心である。真心とはまことの心である。煩惱の心の満面に輝くまことの心である。荒岩の間に湧きだした清水である。

「至心に回向したまえり」これは親鸞聖人によって見いだされた名高い言葉である。「回向したまえり」とは仏より我に、発電所より電灯に、水源より泉にと、真実の一心が与えられることである。「至心回向」の四文字を過去の聖者は「至心に回向す」と読んだ。我より仏に、電灯より発電所に回向することである。

桜が咲いて春になるのではない。

自然が春暖を催して、桜の花は咲くのである。

汽車が走って機関の湯が沸くのではない。

機関車の水蒸気が機関車を動かして、汽車が走るのである。

「至心に回向したまえり」

真理は単純である。

「仏道の正因は大慈悲これなり」

如来の大慈悲は私に至心に回向せられて、我が信心となる。

信心とは如来回向の真実である。

真実の心は胸の涙である。

胸の涙が我を救い、他人を救い、社会を救い、全人類を救う。

スイッチを通じたら、嫌でも電灯は輝かねばならぬ。

水が一度噴き出したら井戸はどうしなくても水がたまる。

如来の自然のはからいによつて、我らの心が、悪に囚われて泣く心と善を鼻にかけ高ぶる心から、救われた時、「俺が」「我が」という固い殻がやぶられて、如来は清水となつて我が心の内に出でたもう時である。

往生とは如来の真実心に生きることである。大慈悲に生かされることである。

親鸞聖人は愚禿のままが如来である。地獄一定だと泣く親鸞に即して動くものは如来である。親鸞は南無阿弥陀仏である。法蔵菩薩のみ姿である。

親鸞聖人は小慈小悲もない身だと泣き、真実心も真愛もない浅ましい凡夫と泣いた。しかし、それは一步も妥協せずゴマ化さぬ、悲痛なる懺悔の告白である。

我等の前に現われたもう聖人は慈悲の文化の先駆者にたまします。万人の乾きた喉をうるおす泉にたまします。更に一切衆生にそれぞれ同一の泉を与えたもう真の善知識にたまします。私は私の全体を赤裸々に投げ出して、聖人のみ教えに聞かねばならぬ。

真の孝子は孝子の名を知らぬ。真の愛の人は真愛の人たることを知らない。聖人がそれである。

人は皆聞かねばならぬ。徹底するまで心の井戸を掘らねばならぬ。

聞くとは善知識を通して聞くのである。

一切を信じ得る善知識の口から、(善知識というのが嫌なら先覚者)如来のみ心を聞かねばならぬ。やがて信心が得られた時、自然の清水の湧いた時である。

井戸を掘るにも、大きな岩も途中にあれば、かたい土の所もある。容易に掘れぬこともある。道を求めてゆくにも、苦しい時もなければならぬ。苦しいからやめるようなのは、ほんとの求道ではない。

私が苦むのは如来が苦しみたもうということである。
他方だとは救われてわかることである。